裸眼視力 1.0 未満の子の割合は 2025 年度に 6 歳 24.09 %・12 歳 53.52 %・17 歳 71.89 % で、同じ年度に 6 歳だった組が 17 歳になるまでに 47.86〜54.71 ポイント上がる——そのうち同じ年度の表で年齢を変えた分は 0.862〜0.890、同じ年齢で年度を変えた分は 0.110〜0.138 で、上がりの大半は年度の動きではなく年齢の差の形をしている [M106]

同じ組の上がり ＝ 年齢の分（同じ年度で年齢を変える）＋ 年次の分（同じ年齢で年度を変える）── 分けるのは、同じ年度で年齢を変えるか、同じ年齢で年度を変えるか

山岸 勇輝（Yuuki YAMAGISHI）／ 独立研究者
ORCID 0009-0006-8587-3450
2026 年 9 月 ／ CC BY 4.0

要旨

文部科学省の学校保健統計調査（年次統計 表15 学校種別 疾病・異常被患率等の推移・1979〜2025 年度、年齢別の表・2008〜2025 年度）で、裸眼視力 1.0 未満の子の割合の形を見た。割合は年度が進むと上がり、年齢が上がっても上がる。どちらでどれだけ動いているかを問う。新しい数学的定理も新しい法則も主張しない。

第一に、**1.0 未満の子の割合は、1979→2025 年度に小学校 17.91 → 36.07 %・中学校 35.19 → 59.35 %・高等学校 53.02 → 71.51 %** と上がった。比べられる年の最大は小学校と中学校が **2024 年度（36.84・60.61 %）**、高等学校が **2025 年度**。幼稚園は **16.47 %** から、最大が **2008 年度の 28.93 %** で、**2025 年度は 23.90 %**（第 4 節）。

第二に、**同じ年度の中で年齢を並べると、2025 年度は 6 歳 24.09 %・12 歳 53.52 %・17 歳 71.89 %** で、**17 歳と 6 歳の差は +47.80 ポイント（2008 年度は +39.05）**。**同じ年齢で 2008→2025 年度を比べると、6 歳 +4.52・12 歳 +5.37・17 歳 +13.27 ポイントで、いちばん大きいのは 16 歳の +14.79**（第 5 節）。

第三に、これが本稿の芯である。**同じ年度に 6 歳だった組が 17 歳になるまでの上がり（3 組で +47.86〜+54.71 ポイント）を、同じ年度の表で年齢を変えた分と、同じ年齢で年度を変えた分に分けると、年齢の分は 0.862〜0.890、年次の分は 0.110〜0.138 だった。6 歳から 12 歳まで（8 組）では、年齢の分は 0.882〜1.010**（第 6 節）。

第四に、**上がりは区分では 0.3 未満に寄る。17 歳の 0.3 未満は 2008 年度 29.98 % から 2025 年度 43.71 % に上がり、0.7〜1.0 未満は 12.27 % から 11.10 % だった**（第 7 節）。

第五に、**6 歳の割合がいちばん低かったのは 2013 年度（17.77 %）で、そのあと 2025 年度の 24.09 % まで上がった。5 歳だけは 2008→2025 年度に 28.93 % から 23.90 % に下がった**（第 5 節）。

第六に、分けるのは **同じ年度で年齢を変えるか、同じ年齢で年度を変えるか** である。「視力 1.0 未満の子が過去最多」と聞いたら、その上がりが年齢の差と比べてどれほどの大きさかを合わせて確かめる。

射程注記：本稿は新しい数学的定理も新しい法則も主張しない——年齢別の裸眼視力の割合は公開の表にあり、本稿は差を取り、二つの道の平均で年齢の分と年次の分に分けただけである。**本稿は公開の集計データの数の形を述べる構造的解釈であり、医学的な助言・診断・治療の推奨ではない。著者は医師ではない。個人の健康に関する判断は医師・医療機関に相談すること。査読を経ていないプレプリントである。 数は子どもの集まりの値であり、一人ひとりの子の視力の良し悪しを判断する基準ではない。視力が下がる理由（近くを見る時間・外で過ごす時間・画面の使い方など）はこの表では分けられず、論じない。** 「年齢の分」は同じ年度の表の年齢の差で、年齢そのものの効きだけでなく、生まれた年の違いも含む。年齢・年度・生まれた年の三つは、この表からは一つに決めて分けられない。数は健康診断の割合の推定値で、注には学校種ごとの標準誤差がある（高等学校と幼稚園が大きい）。表10 の注に従い、2020〜2023 年度は比べる年から外した。毎年別の子を測った表で、同じ子を追った値ではない。**データについて**：学校保健統計調査（文部科学省）は e-Stat から取得し、政府標準利用規約（第2.0版）に従って利用した。本稿の差・年齢の分・年次の分・その割合は、これを加工して作成した。本稿が加えるのは、**同じ年度に同じ年齢だった組の上がりを、年齢の分と年次の分に分けて並べたこと**である。

---

1. 記号と問い

- **1.0 未満の割合 P(a, y)**：y 年度・a 歳の子のうち、裸眼視力（眼鏡などを外した視力）が 1.0 未満の子の割合（%）。視力を矯正している子も、裸眼の値で数える。
- **組**：y0 年度に a0 歳だった子の集まりを、y1 ＝ y0 ＋（a1 − a0）年度の a1 歳で見る。同じ子を追った値ではない。
- **年齢の分と年次の分**：上がり P(a1, y1) − P(a0, y0) を二つの道の平均で分ける。道 1 は先に y0 年度の表で年齢を a0 から a1 に（年齢の分）、次に a1 歳で年度を y0 から y1 に（年次の分）。道 2 は先に a0 歳で年度を（年次の分）、次に y1 年度の表で年齢を（年齢の分）。二つの分の和は上がりにちょうど一致する。

問い：裸眼視力 1.0 未満の子の割合の上がりは、年齢で起きているか、年度で起きているか。

---

2. 下見と設計

正直に書く：設計は表を見てから決めた。

	内容
表	年次統計 表15（1979〜2025 年度）、年齢別の表（2008〜2025 年度の 18 本）、表10（注を読むためだけ）
下見で気づいたこと	同じ年度の中の 6 歳と 17 歳の差（2008 年度 +39.05・2025 年度 +47.80 ポイント）が、同じ年齢の 2008→2025 年度の差（いちばん大きい 16 歳で +14.79）よりずっと大きい
下見で気づいたこと（2）	同じ年度に 6 歳だった組は、11 年後の年度に 17 歳として表に出る。上がりを年齢の分と年次の分に分けられる
下見で気づいたこと（3）	15〜17 歳の値は年度ごとの揺れが大きく、注の標準誤差も高等学校が大きい。12→17 歳の組は芯に使わない
比べたもの	学校種ごとの長い年次、年齢と年度の表、組の上がりの分け方（6→17 歳・6→12 歳・12→17 歳）、区分（0.7〜1.0・0.3〜0.7・0.3 未満）、視力矯正者の割合

---

3. データと確かめ

計算 3.1 取得した 20 本を SHA-256 で固定し、次を確かめた。

- 表10 の注に「令和 2 年度〜 5 年度間は測定時期を異にしたデータ…比較できない」「以下の各表において同じ」がある。表15 は表10 より後の表なので、2020〜2023 年度を比べる年から外した。
- 年齢別の表 18 年度とも、5〜17 歳の 13 の年齢で 1.0 未満の計と三区分を読め、三区分の和 ＝ 計 が 0.01 までの丸めで合う。2012 年度以降の書式（14 年度）では、計 ＝ 100 − 非矯正

の 1.0 以上 − 矯正の 1.0 以上 と、区分 ＝ 非矯正 ＋ 矯正 が 0.05 までの丸めで合う。

- 表15 は 4 つの学校種とも 1979〜2025 年度（47 回）に値があり、三区分の和 ＝ 計 が 0.01 までの丸めで合う。表15 の学校種の値と、年齢別の表の年齢の単純平均の差は、比べられる 14 年度で小学校 0.37・中学校 0.10・高等学校 0.05 ポイント以内。
- 注の裸眼視力の標準誤差は、18 年度で幼稚園 1.06〜2.22・小学校 0.19〜0.41・中学校 0.44〜1.09・高等学校 0.52〜1.60（2025 年度は 1.06・0.30・0.77・0.56）。

---

4. 学校種ごとの長い年次

計算 4.1 裸眼視力 1.0 未満の子の割合（表15・%）

年度	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
1979	16.47	17.91	35.19	53.02
1990	18.63	21.22	41.58	56.38
2000	28.69	25.33	49.99	62.45
2010	26.43	29.91	52.73	55.64
2019	26.06	34.57	57.47	67.64
2024	26.53	36.84	60.61	71.06
2025	23.90	36.07	59.35	71.51

観察 4.2：1979→2025 年度に、小学校・中学校・高等学校はどれも上がった。比べられる年の最大は、小学校と中学校が 2024 年度、高等学校が 2025 年度、幼稚園は 2008 年度（28.93）。 比べられる 43 年度のどれでも 小学校＜中学校＜高等学校 の順で、幼稚園は 1980〜2002 年度のうち 12 回、小学校より高かった。

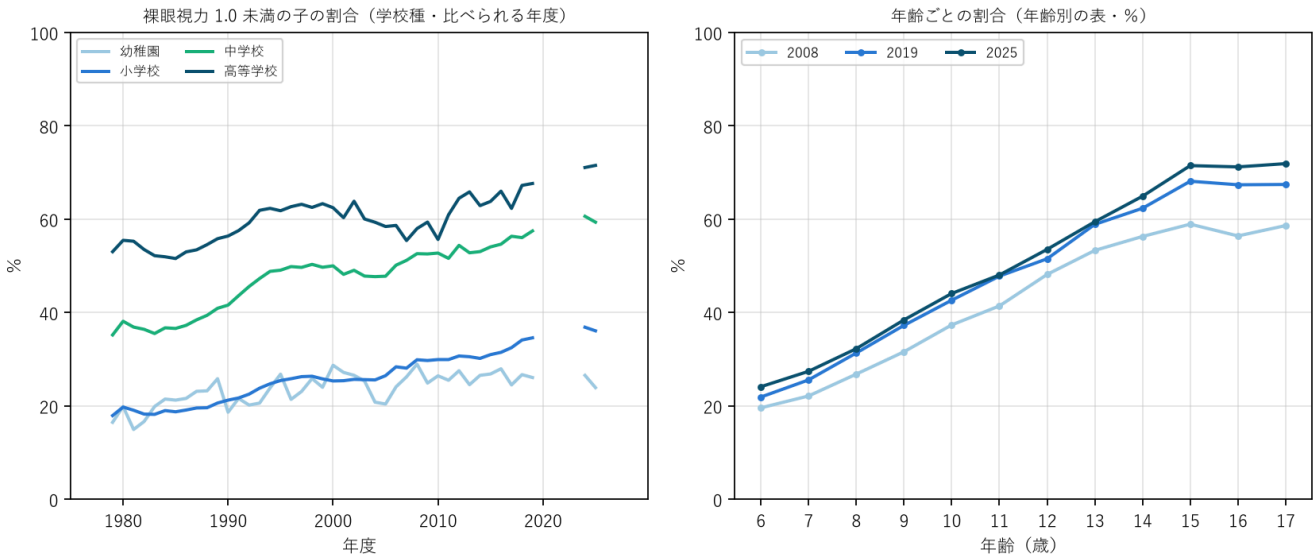


図1：左は学校種ごとの裸眼視力 1.0 未満の子の割合（比べられる年度だけ）。右は 2008・2019・2025 年度の年齢ごとの割合（年齢別の表）。

---

5. 年齢と年度の表

計算 5.1 裸眼視力 1.0 未満の子の割合（年齢別の表・%）

年齢	2008	2013	2019	2024	2025	2008→2025
6	19.57	17.77	21.88	23.96	24.09	+4.52
9	31.58	33.69	37.24	38.63	38.41	+6.83
12	48.15	47.63	51.50	55.73	53.52	+5.37
14	56.29	56.59	62.33	63.55	64.91	+8.62
16	56.40	66.32	67.36	70.73	71.19	+14.79
17	58.62	66.65	67.43	72.48	71.89	+13.27

観察 5.2：同じ年度の 17 歳と 6 歳の差は、2008 年度 +39.05・2019 年度 +45.55・2025 年度 +47.80 ポイント。同じ年齢の 2008→2025 年度の差は、6〜17 歳のどの年齢でも上がりで、い

ちばん大きいのは 16 歳の +14.79、6 歳は +4.52。5 歳だけは 28.93 から 23.90 に下がった。 6 歳の最小は 2013 年度の 17.77 で、そのあと上がった。

---

6. 芯 ── 組の上がりを、年齢の分と年次の分に分ける

計算 6.1 同じ年度に同じ年齢だった組の上がり（ポイント）

組	年度	上がり	年齢の分	年次の分	年齢の分の割合
6→17 歳	2008→2019	+47.86	+42.30	+5.56	0.884
6→17 歳	2013→2024	+54.71	+48.70	+6.01	0.890
6→17 歳	2014→2025	+53.66	+46.23	+7.43	0.862
6→12 歳	2008→2014	+29.35	+29.63	−0.28	1.010
6→12 歳	2013→2019	+33.73	+29.74	+3.99	0.882
6→12 歳	2018→2024	+34.32	+30.95	+3.37	0.902
6→12 歳	2019→2025	+31.64	+29.53	+2.12	0.933

観察 6.2：**同じ年度に 6 歳だった組が 17 歳になるまでの上がり +47.86〜+54.71 ポイントのうち、年齢の分は 0.862〜0.890、年次の分は 0.110〜0.138 だった。6→12 歳の 8 組でも、年齢の分は 0.882〜1.010。** どの組でも、二つの分の和は上がりにちょうど一致する。

観察 6.3：12→17 歳の 8 組では、年齢の分の割合は 0.689〜1.146 と揺れが大きい。15〜17 歳の値は年度ごとの揺れが大きく（17 歳は 2010 年度 55.25・2011 年度 61.66・2012 年度 67.44）、注の標準誤差も高等学校が大きいので、この組は芯に使わなかった。

観察 6.4：「年齢の分」は同じ年度の表の年齢の差で、生まれた年の違いも含む。年次の分が 1 割ほどということは、上がりの大半が「その年度に並んだ年齢の差」と同じ形をしている、ということまでである。

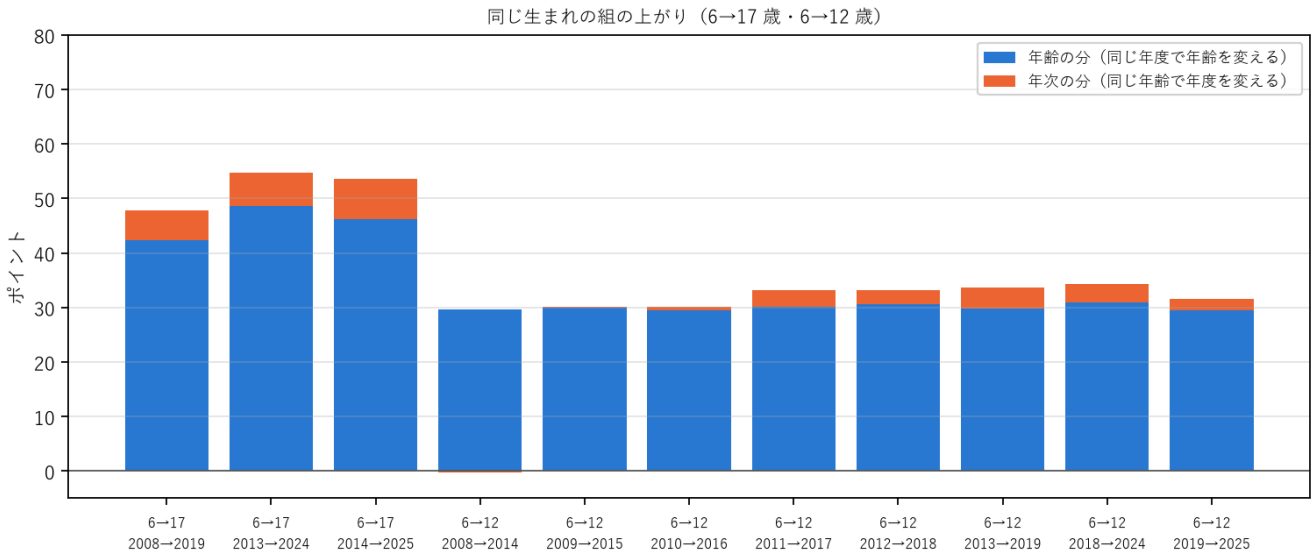


図2：同じ年度に同じ年齢だった組の上がり（6→17 歳の 3 組・6→12 歳の 8 組）。青が年齢の分、橙が年次の分。

---

7. 区分と視力矯正者

計算 7.1 区分ごとの割合（年齢別の表・%）

年齢･年度	0.7〜1.0 未満	0.3〜0.7 未満	0.3 未満	計
6 歳･2008	13.21	5.38	0.98	19.57
6 歳･2025	14.80	7.68	1.61	24.09
12 歳･2008	12.33	16.85	18.97	48.15
12 歳･2025	13.12	18.05	22.35	53.52
17 歳･2008	12.27	16.37	29.98	58.62
17 歳･2025	11.10	17.08	43.71	71.89

観察 7.2：**17 歳の上がりは 0.3 未満に寄っていた（29.98 → 43.71・0.7〜1.0 未満は 12.27 → 11.10）。6 歳は三つの区分とも上がった。**

観察 7.3：表の「視力矯正者」（視力を矯正している子）の割合は、17 歳で 2012 年度 42.58 % → 2019 年度 45.19 % → 2025 年度 51.36 %、12 歳で 24.20 → 22.89 → 25.98 %、6 歳で 1.22 → 2.03 → 2.93 %。この割合は 2012 年度以降の書式にだけある。

---

8. 限界

1. **数は子どもの集まりの値であり、一人ひとりの子の視力の良し悪しを判断する基準ではない。視力が下がる理由は分けられず、論じない。**
2. 「年齢の分」は同じ年度の中の年齢の差で、生まれた年の違いも含む。年齢・年度・生まれた年の三つは、この表からは一つに決めて分けられない。本稿の分け方は、二つの道の平均という一つの決め方である。
3. 毎年別の子を測った表で、同じ子を追った値ではない。
4. 数は推定値で、15〜17 歳と 5 歳は年度ごとの揺れが大きい。12→17 歳の組は芯に使っていない。
5. 2020〜2023 年度は表10 の注に従って比べる年から外した。
6. 年齢別の表は 2008 年度からで、それより前の組は分けていない。

結び

裸眼視力 1.0 未満の子の割合は、2025 年度に 6 歳 24.09 %・12 歳 53.52 %・17 歳 71.89 % だった。同じ年度に 6 歳だった組が 17 歳になるまでの上がり +47.86〜+54.71 ポイントのうち、同じ年度の表で年齢を変えた分は 0.862〜0.890、同じ年齢で年度を変えた分は 0.110〜0.138 だった。年度が進むごとの上がりもあるが、年齢の差のほうがずっと大きい。

分けるのは一つ——同じ年度で年齢を変えるか、同じ年齢で年度を変えるかである。

「視力 1.0 未満の子が過去最多」と聞いたら、**それがどの年齢の数かと、年齢の差と比べてどれほどの大きさかを、合わせて確かめる。**

データと再現

データ	学校保健統計調査 年次統計 表15 学校種別 疾病・異常被患率等の推移（1948〜2025 年度）・表10（注のため）、学校保健統計調査 全国表 年齢別 疾病・異常被患率等（2008〜2025 年度の 18 本）（文部科学省・e-Stat）（2026-09-26・27 取得）
利用条件	e-Stat は政府標準利用規約（第2.0版）に準拠。本稿の差・年齢の分・年次の分・その割合は、これを加工して作成したもので、国が作成した数ではない
範囲	全国・1979〜2025 年度（学校種別）・2008〜2025 年度（5〜17 歳）
検算	`検算/M106.py`（`--zu` で図も描く）。本文の数はすべて `検算/M106_output.txt` から取った
生データ	`data/` に取得したファイルと `SOURCES.md`（URL・取得日・SHA-256・利用条件・定義と計算の置き方）
図	`図/M106_zu1`・`図/M106_zu2`（png・svg・英語版）

参考文献

- 文部科学省. 『学校保健統計調査 年次統計 表15 学校種別 疾病・異常被患率等の推移（昭和23年度〜令和7年度）』. e-Stat（2026-09-27 閲覧）. https://www.e-stat.go.jp/
- 文部科学省. 『学校保健統計調査 全国表 第5表（平成20〜27年度）・第4表（平成28年度〜令和7年度） 年齢別 都市階級別 設置者別 疾病・異常被患率等』. e-Stat（2026-09-26 閲覧）. https://www.e-stat.go.jp/